

先生はなぜ自殺したのか

—『こころ』の謎を解く—

柳澤浩哉

Why did Sensei commit suicide?

Hiroya YANAGISAWA

1. 先生の自殺の謎

本稿は「『こころ』の謎を解く」という副題を持つ連作論文の一つである。連作の最後に位置する本稿は、先生の自殺の理由を明らかにすることを課題とする。先生の自殺の謎は、遺書の後半、先生の結婚から自殺までの部分で読み解ける。これは文庫本で十二ページの長さなので、できれば本稿を読む前に『こころ』の本文を読んで欲しい。結婚から自殺までの先生の行動を簡単に確認しておこう。

結婚直後から先生はKに対する罪悪感に苦しめられる。そのため先生の中には暗い影が常に消えない。ただし、先生は静に自分の秘密を打ち明けないため、静はその影の原因は自分にあると考えるようになる。この影が二人の間に溝を作り、溝は次第に深まって行った。先生は学問や酒に溺れることでKを忘れようとしたが、どちらにも溺れることができない。奥さん(静の母)が亡くなった頃から、先生の中には自殺を予感させる「恐ろしい影」が現れるようになる。先生はそれから逃げられないことを悟られ、自殺の誘惑を感じるようになるが、「死んだ気で生きて行こうと決意」する。

数年後のある日、先生は明治天皇の崩御を知る。先生は「最も強く明治の影響を受けた私ども」が生きているのは「必竟時勢遅れ」だと感じる。そして、静が冗談に言った「では殉死でもしたら可からう」という言葉を受けると、「もし自分が殉死するならば明治の精神に殉死する積りだ」と答える。その一月後、乃木大将が殉死したことを知ると、先生は自殺を決意し、青年のために長い遺書を書き始める。

自殺を決意するまでの間、自分が何に苦しめられ、どんなことを考えてきたのか、先生は遺書に詳しく書き残している。しかし、これだけ詳しく書かれているのに、肝心の自殺を決意した理由がよく分

からない。先生は長年、Kに対する罪悪感に苦しめられていた。しかし、明治天皇の崩御を知ると、突然「明治の精神に殉死する積もりだ」と言い出して自殺を決意してしまう。この決断はあまりに唐突である。罪悪感は一切どこに行ってしまったのか。先生が自殺を決意した本当の理由は何か。そして、なぜ殉死という形を選んだのだろうか。これらの謎を明らかにすることが本稿の課題である。

2. 遺書の「欠陥」

遺書の分析に入る前に、第三部として掲載されている遺書が抱えている大きな問題に触れておきたい。これは『こころ』の遺書をあつかう以上、避けては通れない問題である。

遺書全体を一読すれば気づくように、遺書は先生の結婚を境に大きく調子が変わる。結婚まで(五十一まで)は事件が臨場感を持って語られ、ほとんど小説と変わらないのに、結婚から後(五十二から)は一気に臨場感が下がって小説とは異質の文体になる。本稿では、五十一までを「前半」、五十二からを「後半」と呼ぶことにしよう。

遺書は全体が「です・ます」のゆったりした調子で語られているので、違いがさほど気にならない人もいるかもしれないが、詳しさ・具体性・臨場感、さらに先生の観察力・記憶力などが、前半と後半ではまるで違う。前半・後半で遺書がこんなに変わっているのは、それぞれの文章の目的が違うからである。

前半の目的は、自分とKと静の物語を臨場感豊かに書き残すことにある。自分がその場にいるようなスタイルで、事実を隠さず、詳しく書き残した結果、前半は、ほとんど小説と変わらない文章に仕上がっている。

一方、後半の目的は、自殺の決意に至る過程、そして遺書を書いている「現在」の心理状態をリアルに記録することにある。

遺書は前半・後半とも、それぞれの目的に対して

完璧と言っていいほど見事に作られている。ただし、その結果として、両者はあまりに異質な文章になってしまった。少なくとも、一人の人物が同じ時に書ける文章ではない。さらに、前半の小説のような詳しさと正確さは、自殺を決意した人間に書けるレベルのものではない。もちろん、これは遺書の重大な「欠陥」である。このような「欠陥」のある遺書を、あえて漱石が作ったのはなぜか。これも興味の引かれる問題ではあるが、これについての考察は別の機会に譲ることにする。

本稿では、先生の自殺の謎が後半だけで解ける事だけを指摘しておく。従って、本稿が対象とするのは遺書の後半だけである。なお、この章で遺書という場合、今後は特に断りがない限り遺書の後半（結婚以降）を指すことにする。

3. 何が手がかかりとするか

この謎は『こころ』の中で一番重要であり、最も難しい謎である。遺書の本文を読めば分かるように、読者を納得させる動機はおろか、ヒントになりそうな情報もない。先生の自殺の理由については、手がかかりがあまりに少ない。『こころ』については膨大な先行研究があるが、この謎に正面から取り組んだ研究はほとんどないと言ってよい。あまりに手がかかりが乏しく、どこから手を付けてよいか見当がつかないという事だと思う。しかし、この謎についても漱石は、正解に到達するための手がかかりをしつかりと書き残している。もちろん、それを見つけるのは簡単ではないが。

自殺までの様子を語った遺書の後半は、前半に比べて極端に具体性が低い。事件やエピソードと呼べるようなものはほとんど書かれていないし、発言の引用も数えるほどである。これまでの謎は不自然な言動に注目し、それを合理的に説明できる仮説を探すというオーソドックスな方法を使ったが、今回はその方法が使えない。この方法は、言動が具体的に書かれていることを条件とするからである。

遺書の後半は具体性が低く、情報に乏しい。こんな場合、謎解きの手がかかりにできるものは二つくらいしかない。その一つは遺書の語り口である。どんなにそっけなく書かれていても、そこには語り口がある。この語り口を先生の心理状態を推測するための、重要な手がかかりとなるだろう。そしてもう一つは、書かれていないことである。何が書かれてい

いのか。書かれていないことで、反対に浮かび上がってくるものがある。確かに、この二つは手がかかりとしては心もとないが、漱石が先生の心理状態を伝えようと意図していたならば、この二つの手がかかりから先生の心理状態、さらに、彼の自殺の原因までを明らかにできるはずである。

4. 語り口から探るとということ

語り口から先生の心理を探るとは、たとえばどのようなことか、その例を紹介してみよう。先ほど書いたように、事件やエピソードが出てこないことは遺書の語り口の大きな特徴である。もちろん遺書には過去のことが書かれているが、それらは物語性を切り捨てた記憶の断片である。事件がないというより、思い出が書かれていないと言った方が適当かもしれない。この特徴は先生のある心理を教えてくれる。

先生は結婚生活の中でいろいろな体験をしたはずである。その中には事件と呼べるものや、楽しい思い出もあったに違いない。事実、『こころ』の第一部には夫婦で日光に旅行したことが書かれている。では、先生にとって特別な価値を持っているのは、その中のどの体験だろう。この語り口の中にそれに対する答えが隠されている。

いきなりだが、今、自分が長い遺書を書いていると想像して欲しい。人生を振り返りながら遺書を書いていけば、昨日のこのように蘇ってくる記憶がきっとあるだろう。皆さんはそんな思い出を無視できるだろうか。自分が生きた記録として、たとえ一言でも、それを遺書に書き残すのではないか。しかし、先生は「十日以上」の時間をかけて遺書を書いたのに、結婚後の思い出は何一つ書かれていない。思い出を意図的に書き残さなかったと考える理由は見あたらないから、先生には鮮明に浮かんでくる記憶が一つもなかったということだろう。結婚生活の中で特別な価値を持った体験は何一つない。これはぞっとするほど残酷な事実である。漱石はこの重い事実を、直接的な説明を一切使うことなく、語り口だけで伝えているのである。

語り口の分析例をもう一つ。今度は具体的な引用から考えてみよう。先生は結婚直後から、Kを殺したという罪悪感に苦しめられていた。それについて書いた部分を引用してみよう。

私は妻と顔を合わせているうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立って、Kと私を何処までも結び付けて離さないようにするのです。妻の何処にも不足を感じない私は、ただこの一点に於いて彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻から何故そんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだろうかという詰問を受けました。(五十二)

きわめて穏やかな表現が選ばれているが、ここに描かれている体験の恐ろしさが分かるだろう。「Kに脅かされるのです」という表現に注意して欲しい。先生を脅かしていたのは「Kの影」や「Kの気配」ではなく「K」である。先生は何となくKを感じたのではなく、Kそのものに脅かされていたのだ。先生にはKの姿が見え、声が聞こえに違いない。Kはどんな姿で先生の前に現れたのだろう。Kの死に顔や、「暗い洋燈の光」に浮かび上がった血まみれの姿が見えたかもしれない。あるいは、死んだKの頭を持ち上げた感覚の蘇ることがあったかもしれない。自分がKを殺したと思っている先生にとって、これほど恐ろしいことはないだろう。

この作品を読んだ時、Kの自殺場面の描写が詳細で生々しい事に違和感を抱いた読者も少なくないと思う。これは偶然ではない。漱石は、この場面を読者の脳裏に残そうとして、鮮明に描いたと考えなくては行けない。先生の記憶の中に、このグロテスクな光景が鮮明に残っているからである。そして、その映像が先生を苦しめ続けたのである。

しかも、Kは静とともに現れる。あれほど恋いこがれた静を「遠ざけたがりました」というのは異常事態である。静に対してはもちろんだが、何より先生自身にとって残酷である。愛しい静がいる限り、Kも消えることはないのだ。こんな恐ろしい状況に置かれながら、何年も生き続けられる人間が、果たしてどれくらいいるだろう。

先ほどの引用は極めて穏やかで淡々とした語り口である。私はこの語り口に不思議なものを感じる。穏やかなことが不思議なのではない。自殺を決意して何事にも動じなくなった心境には、むしろ穏やかな口調が相応しい。ここで不思議なのは、先生が感じていたはずの恐怖や絶望が全く伝わってこないことである。穏やかな口調でも体験の恐ろしさは伝え

られる。いや、身の毛もよだつような体験を語ろうとすれば、どんなに穏やかに語ったつもりでも、その恐怖は伝わるものである。静を遠ざけたとあるから、先生がKの亡霊に怯えたことは間違いないのに、この語り口からは亡霊に恐怖したことが全く感じられない。私はこの点を不思議に感じるのである。

これほどの恐怖と絶望にさらされながら、錯乱することも、逃げ出すこともなく、静との平穏な生活を何年も続けられたことは、普通の人間にできる事ではない。恐怖に対する並外れた強さが先生にあったと仮定しない限り、この事実は説明できないように思う。

実は、先生は恐怖に限らず、負の感覚に対して並外れた耐性を持っている。殉死を考える上でこの耐性は重要な要素となるので、これについてももう少し考えてみよう。やはり一番重要なのは静との関係である。

5. 先生と静の関係

先生と静とは表面的には幸福な夫婦であるが、先生の暗い影が二人の間に溝を作っている。そして、先生が秘密を明かさないために溝は時間とともに深まって行く。遺書に直接書かれているのはここまでだが、語り口に注意すると二人の特殊な関係が見えてくる。

静は遺書にしばしば登場するが、遺書での彼女の役割はいつもほとんど同じである。一言に言えば、先生の苦痛をいっそう強める、そんな役割である。先生がどんな状態の時に静が登場しているかを、遺書に出てくる順にあげてみよう。

「Kに脅される」恐怖のために、静を遠ざけようとした時。

酒に酔うことで自分を忘れようとしたが、酒に酔えずに苦しんでいた時。

何もできず、書物にも集中できずにいる時。

母親の死後、静に対して同情と自責の念を抱いていた時。

先生は静に言われるまでもなく、自分に苛立ち、自分を責めて苦しんでいる。そんな先生に、静は泣き言や恨み言などをぶつける。心の傷口に塩を塗られて、先生は辛かったに違いない。

確かに、静は先生が苦しんでいない時にも一・二度登場しているが、その時でも彼女には、溜息をついたり、冷やかな目を向けたり、という役が割り

当てられている。先生にとって静は苦痛を深めることしかできない存在だったのである。

遺書を表面的に読む限り、静は無神経な悪妻であったように見えるが、果たして本当にそうだったのでろうか。先生との結婚は静も望んでいたことである。結婚生活の中で、静は愛する夫を何とか救おうと努力し続けていたのではないか。遺書には次のような箇所がある。

私と妻とは元の通り仲良く暮らして来ました。

私と妻とは決して不幸ではありません。幸福でした。(五十四)

“夫には大きな影があるが、その理由を夫は絶対に教えてくれない。ただ、その影の原因が自分にあることは間違いないようだ。”先生の妻となってから、静はずっとそう思い続けていたはずである。そんな静が心から幸福になれるのだろうか。表面的であるにしろ、先生が「幸福でした」と感じられたのは、静が幸せな妻を装い続けていたからに違いない。静も先生と同じように、自分の苦悩を相手に見せないように、苦しい努力を続けていたのである。当然、苦しんでいる先生を見て、無関心・無神経でいられたはずがない。先生にいろいろな働きかけもしただろう。しかし、静が優しい、静に救われた、静が愛しい、といった記憶を遺書から見つけることはできない。先生は静をまるで見ていない。彼にとっての静は、自分を理解できず、無神経に自分を苦しめるだけの存在なのである。

先生が静を一面的に見ていることはこれ以外の場所からも分かる。それを特に感じさせるが次の部分である。自殺を思いとどまった経緯を書いた箇所であるが、この思考には異常なところがある。

私は今日に至るまで既に二三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があります。然し私は何時でも妻に心を惹かされました。そうしてその妻を一所に連れて行く勇氣は無論ないので。(中略)

同時に私だけが居なくなった後の妻を想像して見ると如何にも不憫でした。母の死んだ時、これから世の中で頼りにするものは私より外になくなったと云った彼女の述懐を、私は腸に沁み込むように記憶させられていたのです。(五十五)

どこが異常か分かるだろうか。それは順序である。自殺を考える時、最初の選択肢として無理心中が来るのは明らかに異常である。先生にとっては自分が一人で死ぬよりも、静との無理心中の方が自然なのだ。先生は静と二人だけの世界に生きていた。だから、静を一人で残すことが耐え難いのである。引用にある静の言葉を見て欲しい。「世の中で頼りにするものは私より外になくなった」。この言葉に、先生が過剰に反応していることは重要である。これは、二人だけで生きているという先生の感覚に共鳴する言葉である。だから、先生はこんな過剰反応を示したのである。

先生が二人だけの世界に生きていたことを示す、別の証拠をあげてみよう。酒を止めた先生は勉強も手に着かず無為の時間を過ごしている。もちろん先生はそんな自分に苦しんでいるのだが、静には先生の悩みが理解できない。

私は妻から何の為に勉強するのかという質問を度々受けました。私はただ苦笑していました。然し腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないかと思うと、悲しかったのです。(中略) 何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事も能くありました。(五十三)

静に理解されないと思うだけで、先生は「世の中にたった一人住んでいるような気」になってしまふ。静と先生との二人だけの世界に生きていたからである。

静に対する先生の感覚はあまりに自己中心である。二人だけの世界に生きていると感じながら、静の一面、それも自分を苦しめるという面しか見ていない。無理心中の選択肢からも感じることであるが、先生は静を対等な存在として見ていない。先生のこの意識が二人の悲劇の根本原因であると私は思う。対等に見ていないから、先生には彼女の苦しみも、思いやりも分からない。もしも静を対等に見ていれば、先生にも彼女の苦しみが感じられたはずである。彼女の苦しみが感じられれば、彼女を救うために、あらゆる手段を試みたのではないか。おそらく、その中には自分の秘密を静に打ち明けるといふ選択肢も含まれていたに違いない。それはかなわなかったかもしれないが、先生が静を救おうと本気になれば、静の苦しみは相当に軽くなったはずである。

本稿の目的は先生の批判ではない。先生の状態を確認することである。先生は静と二人だけの世界に生きていながら、静は先生を苦しめるだけの存在だった。歪んだ目で静を見ていた先生には、そうとしか感じられなかったのだ。想像するだけで息苦しくなりそうな状況に置かれて、先生が次第に自殺を考えるようになったのは自然な事と言うべきかもしれない。

私がこの牢屋の中に凝としていた事がどうしても出来なくなった時、又その牢屋をどうしても突き破る事が出来なくなった時、必竟私にとって一番楽な努力で遂行出来るものは自殺より外にないと私は感ずるようになったのです。(五十五)

ここでの「牢屋」という比喻には先生の閉塞感が凝縮されている。

希望の全くない、息が詰まりそうな日々の中で、先生は徐々に自殺の誘惑を感じ始める。もちろん、Kの亡霊の恐怖も消えない。もしも先生が外に仕事を持っていたならば、事情はまた違ったものになったかもしれない。しかし、先生は家の中で何もせずに、静と二人だけで生きている。これだけの条件が揃いながら、自殺に向かわず何年も行きられたことに、私はむしろ驚きを感じる。先生は「私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。」(五十四)と書いているが、こんな漠然とした「決心」で、この状況を生き抜けるものだろうか。確かに「二三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした」(五十四)と書かれてはいるが、実際に自殺を試みたことはないようである。それ以上に、「二三度」という数が、私にはあまりに少ないように思われる。

ここでも、先生の耐性を仮定せざるを得ない。彼は絶望としか言いようのない状況を、自殺を試みることもなく何年も生き抜いた。もちろん、感覚も麻痺していない。彼には自分を自殺に向かわせない強い力があつた。それがどんな力であつたのかはまだ分からないが、そのような力を仮定しない限り、この事実は説明できないだろう。

6. 先生は最後まで理性を保っていた

遺書はどの部分も明晰で、曖昧、飛躍、冗長、繰り返しといった思考の混乱を感じさせるところがな

い。また、落ち着いた説明的な語り口がずっと保たれて、非常に安定した感じがする。この口調には、遺書を書いている「現在」の先生の心理状態が反映されている。遺書を書く最後の瞬間になっても、先生は冷静な思考力を保っていたから思考に乱れが生じないのである。先ほど、先生には自分を自殺させない強い力があつたと書いた。この力の正体は、おそらくこの冷静な思考力である。

先生が最後まで冷静な思考力を保っていたことは、彼の殉死を考える上での最も重要な条件である。私はこれを前提として、この先の考察を進めるつもりなのだが、語り口に乱れないことを根拠に、冷静な思考力を断定した事に、あるいは失笑した読者もいたかもしれない。私の推論が安易なものに見えるのは無理のない事だと思うので、本論をいったん中断して予想される反論を潰しておきたい。反論を全て潰せると確信しなければ、私もこんな推論を立てたりはしない。予想される第一の反論は次のようなものである。

小説は読ませるための文章なのだから、明晰で混乱がないのは当然である。その文体を根拠に、語り手が理性を保っていると判断するのは小説のルールを無視した暴挙である。

この反論に対しては遺書の個性的な語り口を確認すれば十分だろう。穏やか過ぎる口調、もって回ったような遠まわしな表現、他人ごとのような客観的な説明、どこを取り出してみても遺書の語り口は個性的である。それでは、遺書の語り口がこれほど個性的なのはなぜか。言うまでもなく、遺書を書いている先生の「現在」を表現するためである。先生の「現在」の心理状態を反映させた結果として、この個性的な文体が選ばれているのだ。ならば、語り口の特徴から、先生の「現在」の心理状態を推測することは理にかなっているはずである。ただし、こう書いても、語り手の言語能力は例外だという反論が出るかもしれない。これを第二の反論として次にあげてみる。

登場人物が語り手を兼ねる場合、彼には語り可能にするための特殊能力(卓越した観察力・記憶力・言語能力など)が与えられる。この特殊能力は小説を成立させるためのもので、彼の劇中の能力とは別物である。たとえば、長い物語を記憶

して語れる人物が、劇中で物忘れをしても矛盾とはならない。つまり、遺書が明晰で論理的なのは「語り手の特殊能力」によるものであり、劇中の先生がそれと同じ能力を持っていたと考えるのは、小説のルールの無視である。

確かにこの特殊ルールは多くの物語に適用される。たとえば、「こころ」の遺書であっても前半（結婚まで）にはこのルールを適用する必要があると私は考えている。ただし、この本では遺書の「欠陥」に深入りする気がないので、この問題にはこれ以上言及しない。（既に書いたように、私は遺書の前半と後半とは別の作品だと考えている。だから、本稿では遺書の後半だけを使っている。）

この特殊ルールは万能のようにも見えるが、もちろん、このルールが適用されない物語もある。たとえば遺書の後半がそれである。私がそう断言する根拠は、遺書の最後に置かれている「あとがき」にある。遺書を書き終えた先生は、遺書の最後に自分の「現在」の心情を書き残している。そこには静への気持ち、遺書を書いた動機、青年への頼みごとなどが、ある程度の分量で残されている。これを「あとがき」と呼ぶことにしよう。「あとがき」には、この特殊ルールが適用されない。「あとがき」は先生の劇中での発言だからである。つまり、先生が「語り手ゆえの特殊能力」を持っていたとしても、「あとがき」にはその能力が現れない。だから、「あとがき」から読み取れる心理状態や思考力が、遺書の他の場所と同じであれば、先生は「語り手ゆえの特殊能力」を持っていないことになる。

そして、「あとがき」の語り口は遺書の他の場所と変わらない。いや、どちらかといえば、他の箇所以上に冷静である。だから、遺書を書いた先生は最後の最後まで冷静な思考力を保っていたと結論づけられる。遺書の語り口から「現在」の心理状態を推測したことに、方法上の間違いはない。

漱石は極限状況においても冷静な思考力を失わない人物として先生を造形し、彼に自殺に至る過程を報告させた。そして、漱石は最後までこの設定どおりに先生を行動させた。漱石は先生に対し、ある意味で残酷である。並外れて強い耐性と理性を与えておいて、容赦ない苦痛を与え続けたのだから。先生はどんな苦痛にさらされようと、感覚を麻痺させることも錯乱することも許されず、ひたすら自分を観察するよう定められているのである。

7. なぜ殉死なのか、なぜ明治の精神なのか

先生は最後まで冷静な思考力を失わなかった。先生の殉死を考える上で一番重要な条件がこれである。先生には自殺以外に取るべき選択肢のないことが分かっていたし、徐々に自殺の誘惑を感じるようにもなっていた。しかし、冷静な判断力がそれを許さなかった。だから先生は生き続けたのである。

ただし、どんなに冷静な思考力を持っても、全ての自殺を禁じる事はできない。自分の死を納得し、受け入れることができれば、どんなに冷静な状態にあっても人は自殺する事ができる。それはどのような場合だろう。これは軽々しく論じられる問題ではないが、自殺の根拠を自分の外に求められる場合が、その典型となるだろう。自分以外の誰か（何か）ために死ぬという形ならば、自分の死に意味を見出せるからである。たとえば、自分の死が誰かを救う、大儀・信念・宗教のために死ぬ、死によって何かを訴えろといった場合がそれにあたるだろう。そのような場合には、人はむしろ冷静になり、理性が死の意味を認めて、自分の死を受け入れるのではないか。事実、そのような人が残した遺書は冷静であり、澄みきった感性や深い優しさを感じさせるものが少なくない。どんなに冷静な思考力であっても、自殺の意味と必要性を承認できる論理が確立できれば、自殺を容認するのである。

先生はKに対して強い罪悪感を持っていた。もしも先生の気持ちが真っ直ぐにKに向かっていたら、冷静さを保ったままで、罪悪感のために死ぬことも可能だったと思う。Kを殺した責任を取る、Kに死んでわびろといった形で、自分の外に自殺の根拠を求められるからである。これは静に対しても同様である。先生の意識が真っ直ぐに、そして真剣に静に向かっていたならば、静を開放するために死ぬ、といった形での自殺もありえたかもしれない。しかし、先生の罪悪感には次のようなものだった。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくして遣れと私に命じます。
(五十四)

想像しにくい感覚ではあるが、先生の気持ちがK

に真っ直ぐ向かっていなかったことは明らかである。彼の意識はKではなく、「人間の罪」という極めて抽象的なものに向かっていたのである。これでは、Kのために死ぬことは不可能だろう。

では、なぜ先生は殉死に惹かれたのか。死の根拠を自分の外に求める自殺の典型が、殉死だからである。殉死は理性が承認しやすい自殺の典型である。冷静な思考力を保ち続けていた先生は、殉死ならば自殺することができるかと直感的に気づいたに違いない。先生は殉死を抽象的に考えたりはしていない。静から殉死という言葉聞いた時の反応を引用してみよう。

私は殉死という言葉を残んど忘れていました。平生使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向ってもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだと答えました。私の答も無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。(五十六)

【こころ】の中でも特に有名な一節である。この部分について、多くの先行研究が発言をしているが、本稿では勝手な想像を入れずに、次の二つの事だけを確認しておきたい。一つは、殉死という言葉の持つ可能性を先生自身がまだ理解しきれていないこと。この言葉に自分を自殺させる力のあることに、先生はまだ気づいていない。そしてもう一つは、殉死を遂行できる論理を、先生が瞬時に完成させていることである。「もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだ」がそれである。これは先生の口から思わず出て来た言葉であるが、先生がこの論理に納得し満足していることが重要である。それは、「その時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。」という言葉から明らかである。この瞬間、先生は殉死できる可能性を手にしてしまったのである。もちろん、自分では全く気づかないままで。

この引用の中で気になるのが、「明治の精神に殉死する積りだ」という決意である。印象的で思わせぶりの決意であるが、抽象的過ぎてその気持ちが想像できない。これは一体どういう気持ちなのだろう。これを考える参考になるのが、先ほど確認した

先生の特異な罪悪感である。先生の罪悪感はKや静といった身近で具体的な人間ではなく、「人間の罪」という抽象的なものに向かっていた。先生は具体的な人間よりも、倫理的価値という抽象的なものに反応する独特の性向を持っている。おそらく、この性向に「明治の精神」が感応したのだろう。先生は明治天皇の崩御に影響されて殉死を決意するが、明治天皇に殉死しようと思ったことは一度もないことに注意して欲しい。遺書には次のようにある。「私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました。」先生が反応しているのは明治天皇という人間でなく、あくまで「明治」という時代なのである。「明治の精神に殉死する」という感覚は想像しにくいだが、個々の人間ではなく、抽象的な倫理的価値に反応しやすい性向を持つ先生には自然な決意だったに違いない。

ここは非常に漱石らしいところである。漱石は先生という人物を造形するにあたって、読者の共感を得られるかという点はあまり考慮していない。しかし、先生の行動の必然性・一貫性には非常に神経を使い、注意深く読めばそれが見えるような配慮を行っている。これは【こころ】以外でも見られる漱石の創作上の基本姿勢である。この姿勢を自己満足と批判することも可能かもしれないが、私はこれこそが、漱石の厳しき・誠実さであると思う。

8 先生の変化

先生は何年にもわたって感覚や意識に変化のない時間を生きていた。しかし、遺書は明治天皇の崩御を境にして一気に時間が流れ始める。実に皮肉なことであるが、殉死の可能性に気づいた瞬間から、先生は自分の時間を生き始めたのである。

遺書(後半)には、エピソードや出来事と呼べるものが書かれていないが、実は一箇所だけ例外がある。明治天皇の崩御を知った段落(五十五の最後)から、乃木大将の殉死に想像をめぐらせる段落(五十六の中程)までがそれである。文庫本でわずか1ページ余りであるが、この部分は単にエピソードが書かれているだけでなく、語り口も小説のものに戻っている。その一部を引用してみよう。

御大葬の夜私は何時もの通り書齋に坐って、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去った報知の如く聞こえました。後で考える

と、それが乃木大将の永久に去った報知にもなっていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だと云いました。(五十六)

深夜の静寂と号砲、それを聞く引き締まった気持ち、そして乃木大将の殉死を知った興奮、どれも臨場感を持って伝わってくる。抑制された語り口を守りながらも、崩御の前と比べると文章が活き活きしていることが分かります。

この口調の変化は先生の心理の反映である。殉死の可能性を手に入れたことで、それまで止まっていた時間が動き始め、語り口も変わる。語り口の変化は、先生が自殺を待っていたことの現れである。ここで重要なのは、その変化の向かう先を、先生がはっきり予感していることである。先生は言う。「最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後に生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。」明治天皇の崩御を知った時点で、先生は自分の死を予感していたのである。しかし、先生はその予感に怯えるどころか、むしろ、語り口は活き活きするのである。

何年もの間、先生は自殺の機会を求めていた。待っていたと言うべきかもしれない。もちろん、先生自身はこの願望を自覚していないが、その機会を無意識のうちに求めていたのだろう。そして、明治天皇の崩御を知った時、先生は、自分の求めていたものが何であったかを自覚したのだろう。

彼の性向は特殊である。個人に対する罪悪感には彼を自殺させることができない。彼を殺せるのは、倫理的価値観に訴え、彼の理性を納得させるものである。これを満たすことが自殺の必要条件なのだ。先

生はこの条件を満たす「何か」を待ち続けていたのである。先生は自殺のための方程式を持っており、その方程式を満たす解を何年もの間ずっと待ち続けていたのである。そして、ようやく出会えた解が「明治の精神」であり「殉死」だった。だから静から殉死という言葉聞いた時、先生の中で瞬時に「明治の精神に殉死する」という論理が完成したのである。

この論理が完成した段階で、先生の自殺は可能になっている。先ほど検討した小説的な語り口は、この時の開放感の反映である。しかし、殉死を実行するためには最後のきっかけが必要だった。殉死の論理を完成させた時、先生は次のように言っている。「私はその時何だか古い不要な言葉に新らしい意義を盛り得たような心持がしたのです。」この時、殉死という言葉は先生の中でまだ古語のままである。古語に「新らしい意義を盛り得」ても、それだけでは古語が蘇ったことにはならない。現在の中でその言葉が通用するようになることで古語は現在によみがえる。

それが乃木大将の殉死である。乃木大将の殉死が、殉死という古語が現在によみがえらせたのである。この時、先生の論理が現在の論理として呼吸を始める。こうして先生は長い苦しみからようやく解放されたのである。

注

引用は次の文献による。
新潮文庫「こころ」(平成9年)